新京日日新聞
夕刊
一月四日（木）

日滿名士の年頭所感

滿洲國司法の過去と本年の抱負

司法部總長　馮涵清

顧過去二年間我が司法部同人の、孜々として從事して來た處のものは、內に對しては司法改善の基礎樹立、外に對しては、治外法權撤廢の津梁の造成であつた（中略）

既往一切の施設は、何れもこれから分條析縷の細密的實行時期に入る譯である、部內外の同人を督勵して初志に基き努力を續け、內全國法治の先明を睹、外法權回收の大業を完成すべく

一、法官養成所を設け、審檢の專門人才を養成し

二、辯護士を嚴選して民權の保障を鞏固にし

三、少年法の制定、少年矯正機關の組織により健全なる國民を增加す

四、免囚保護事業を提倡し、社會の秩序安寧を計る

等の各項を實行し、余力あらば他に及ぶ心算である、茲に大同三年新春を迎へ余は既往を顧み、來るべき責任の繁多重大を思ひ、感慨慚愧に堪へないものがある（下略）

大同三年の希望と覺悟

鐵路總局長　宇佐美寬爾

世界史上に輝かしくも一新紀元を劃した滿洲國成立後第三年の元旦を迎へて不肖等更に新たなる希望と覺悟に胸奥の高鳴るを覺ゆるものである、顧みれば滿洲國の建設工作は世界の危惧を外にして眞に驚異的進展振りを示して來た、之を政治に觀、之を經濟に觀るに緊密なる日滿合作の成果は着々として現れ、國內の整備は歐米各國視察者の異口同音に讃嘆する所である、徒らなる形式論、面子論を棄て實質的經濟的に滿洲國との關係を打開せむとの氣運が隣邦中華民國を始めとして諸外國に勃興し來つた事は明かに看取し得る所であつて之全く滿洲國建設工作の進展を裏書する以外の何物でもない

之を鐵道に就て見るに昨年三月鐵路總局設置せられ全國有鐵道を打つて一丸として之が經營の任に當るや從來の小鐵道分立に依る不便不利は漸次解消され、內部的組織も漸次整備し來り國家の動脈たる本領を次第に發揮するに至つた又京圖線の全通により多年待望の所謂吉會鐵道問題が解決され國都新京と裏日本とを結ぶ新交通路の完成は日滿經濟ブロツクの擴大強化に無限の威力を加へ、更に克山、海倫間鐵道の開通は南北滿洲を直接に連結する大幹線の完成として交通史上劃期的の事實である、然し乍ら昨年度に於ける鐵路總局の努力は這の彪大なる、又關係複雜を極むる各鐵道の整備と統一に主として費され、假令其の間既に前年度に比し格段の業績を擧げ得たとはいへ、尚準備工作の時代に過ぎなかつた、今年は其の準備工作の大半を完了して愈よ本格的の活動に進むべき年でなければならぬ、即ち今年度に於ては曩に開通式を擧げた拉賓線の國有鐵道編入に依つて國有鐵道全線の連絡が完成すると共に鐵路經營組織の一新統一的運輸規程の實施に依つて經營の合理化が具現され、綜合經營の陣容を整へるわけである

不肖等は王道は鐵道よりの標榜に基き、與へられたる此の使命の遂行に邁進しつゝあるのであるが、本年々頭に際しての希望と覺悟も亦完成すべき此の陣立に依據して最善を盡さんとするにある事は建設工作に躍進的成果を齎す事を得ば光榮啻に不肖等のみに止まらないであらう

年頭の辭

南滿洲鐵道株式會社副總裁　八田嘉明

興亞の榮光に輝く新春に際し、先づ聖壽の萬歲を奉祝し日滿兩國共存共榮の實體炳たる現地に在り親しく此の兩國興隆の躍進の狀に接し得ます事は私の寔に欣快に堪えない次第であります

顧ふに新興滿洲國承認の昨年度は實に私共の勇躍獻身の好機でありました。私共は限り無き全國民支持の下、列國注視の裡に在つて、上下一體克く斯の天業恢宏の任に服したのであります

其の間私共は尊き幾多の犧牲を拂ひ人柱を樹てました。而して感奮興起した私共は此の大滿鐵を擁して兩國發展への實踐者として又先驅者として社是を體し、內は冗費を斷行し諸般の業務を改善し、奮然斷ずべきは斷じ、社業の擴大強化に邁進し、克く其の實力を發揮し、外其の信頼を高めたのであります。併し乍ら兩國現下の情勢は容易ならぬものがあります。即ち滿洲國は國內治安工作の一段落を告げますると共に更に邁進して建設途上に在るのであります

…も約する喫緊時たるものと信ずるものであります。これば大滿鐵の下、此の經濟主動力として自他共に認むる私共は此の天與の機會を翫味し、眞に兩國興隆を企し、兩國依存契結の材たるべく一致團結、粉骨碎身以て其の精華の發揮を期して飽迄精進する、之私共に與へられた修業道であり國家に貢獻する所以であると思ふのであります

戊歲の歴史（二）

古代から昭和の現代まで織り込まれた事件の數々

二二九四年、明正天皇の寬永十一年の戊歲には、耶蘇教及奉書船以外の渡航禁止の高札を長崎に建て、出島を築き德川三百年の鎖國がその緒につき出した、鎖國はこの年より二年後、寬永十三年に遂に發令されるに及んだ、寬永十一年には一世の名匠左甚五郎が沒してゐる

德川時代に入つてから、戊歲史には、特別非常の事も次第に影をひそめ、世は太平のうちに續く、しかし、鎖國に次いで耶蘇教、蘭學等の禁止に關する事件が戊歲史に散見される、例へば、二三一八年の戊歲には、大村藩內の耶蘇教徒六百餘人が捕へられてゐる一揆六百人の教徒が一擧に捕へられたことを思へば、當時耶蘇教の侵入が如何に强かつたかゞ判る、又二三三〇年の戊歲には淸商の密賣を禁止し二四五〇年の戊歲には蘭人五年一貢の令を出し、又異學を禁じてゐる

しかし時と共に異國人が我國に渡航し、或ひは邊境をうかゞふ者が現れ、漸く國防の急なる時代がやつて來た、二四三八年、後桃園天皇安永七年十代將軍家治の戊歲には、六月露人が國後島に來り、二四六二年の戊歲には函館奉行を置き、二四七四年の戊歲には伊能忠敬が沿海實測全圖を完成した、二四九八年の戊歲には幕府は鳥井耀藏に互相等沿海巡視を命じてゐる、二五一〇年の戊歲には海防嚴飾の勅諚が幕府に下り、神島及佐渡相川に砲台を築いたものだ、二五二二年文久二年戊歲の正月には所謂「坂下門の變」が起り、更に八月には「生麥の變」十一月には勅使三條實美の東下等物情漸く騷然たるものがある、德川三百年間の戊歲史としての事件は大凡これ位に止まる

年頭に題す

第〇〇〇團長　畑俊六

謹んで東天を彩り、瑞雲千里の氷原に靉靆し、鷄鳴曉を告げて昭和九年の元旦を北滿に於て迎ふ。茲に昭和大同治下億餘の蒼生は謹みて、畏くも聖壽の萬歲を奉祝し、寶祚の無窮を祈願す

恭しく惟ふに、昭和の聖代茲に九歲を重ね、明治大正の御代に彌增して內は、和平靜謐、外は國威益々揚り、皇道の旗幟惠風に翻り正義の砲聲殷々として世界を震駭し、以て範を宇宙に垂れんとす是偏に上陛下の御稜威に據るものにして、臣等の誠に恐懼惜く能はざる處なり

顧るに我師團の精鋭は征戰既に二年、南は淞滬、熱河に奮戰し、北は大興安を突破し反賊匪敵を掃蕩し皇軍威武を中外に宣揚し滿洲國の治安を益々向上せり、然る時東洋平和を永遠に確立すべき吾等の大使命に對しては、尙其の第一歩を印せるに過ぎず、前途益々多事なるを覺ゆ、忘る勿れ、客年三月二十七日畏くも大詔は煥發せられ聯盟を離脫し、帝國の非常時を宣し給へるを、今や皇國は不羈不東斷乎たる決意を以て所信に向ひ世界に濶步すべき境地に在り爲ぞ過去數十年間國運を賭して十數萬の生靈を犧牲とし建設せる滿洲國をして、平和の假面を覆ふ外敵の爪牙に委せんや、世界は、今將に神國三千年の危機に直面す。此の秋に方り日本男子は敢然として奮起し、其の本然の精神に復歸し、上下一致して錦旗の下に勇往邁進せば、其の僞ふ所何物かあらん

夫れ一年の計は、元旦にあり、苟くも、生を皇國に享くる者非常時日本の興廢を双肩に負ひ、山行かば草苔す屍の忠勇義烈を以て邁進し、君國のために殉じ、悠遠なる聖業の完成を期さゞるべからず、東亞の暗雲低迷して、歸趨愈よ逆睹すべからざるの秋今偶々北滿の皇師の陣頭に立ちて元旦を迎ふ感慨亦禁ぜざるものあり

茲に所懷を述べて在滿同胞諸士の決意を促す

滿洲國參議　田邊治通

大同三年の春を迎へるに當り、我滿洲國の基礎愈よ固く、王道の光天地に遍く、五族の民擧けて樂土を謳歌しつゝあることは、慶賀に堪えぬ所であります

是れ固より執政閣下の英明と文武百官の努力、三千萬民の自覺に基くものでありますが、また友邦日本の絕大なる援助の賜でありまして國民の齊しく感謝する所であります

今や日滿兩軍不斷の努力により治安は完全に維持され交通通信金融其の他資源開發に必要なる諸般の施設は悉く其の陣容を整へて潑剌たる經濟活動に入らんとしつゝあるのでありますが、各國が擧けて深刻なる不況に沈淪しつゝあるとき寔に世界の驚異であるのみならず、實に古今の建國史上稀に觀る所であります

茲に於て最も肝要なことは魂の開眼であります。立國の大義を闡明し形而上下に卓越せる獨自の文化を創設することであります

凡そ文化の爛熟するところ頽廢の極、自らなる崩壞を齎すものでありますが高度の文化を擁する文明諸國は今や沒落の斷崖に佇める觀があるのであります。吾人は思を深くここに致して、これら一切の既成文化に對し透徹せる批判を下すと共に、探つて以て反省の資となし、新たなる文化を創造し、人類の大理想を茲に實現せむことを期し度いのであります

些か所懷を述べて新年の劈頭に寄せる次第であります

日滿戀曲　生命線を行く（五十六）

（上演上映）　國友雄吉　（荒川芳三郎畫）

支那兵の一隊

係員と、尙押問答の結果、海拉爾までは、どうかかうか、行けさうであつた。

そこで倭一は、海拉爾行きの相談を楠本に持ちかけると、楠本も異議なく同行するといつた。しかし、彼はあまり、氣乘のしない樣子であつた。

それから二人は、漸くのことで海拉爾に着いた。

それはもう、夜の十時過ぎであつた。季節は、まだ漸く十月に入つたばかりだが、もう、零下四五度といふ滿洲名代の寒さが押し寄せて來て、顏も手も凍るほどであつた。それもその筈、ツイ四五日前には、もう雪さへ降つたといふのであつた。

汽車を降りると、二人は取り敢ず、停車場の構內にある食堂へ行つた。

食堂には、一杯の客が、薄暗い電燈の下で、酒を飲んだり食事をやつてゐた。ぽか〳〵と溫かいストーブの溫みが、室一ぱいに溢れて居た。

寒さを凌ぐためと、そして少しは、苦惱も紛れるであらうかと思つたので、倭一は酒を命じた。

しかし、いくら杯を重ねても倭一は、少しも醉へなかつた。それに反して楠本は、醉が廻ると、次第に元氣を出して、はしやいで來るのだつた。

それが、弟の身の上を心配して、はる〴〵滿洲へやつて來た男だとは、倭一には、どうしても考へられなかつた。

二人が食事をして居る處へ、ドヤドヤと支那兵の一隊が突然現はれた。

驛館の用事で時々やつて來て、この邊の地理に可なり明るい倭一は、それが、この海拉爾の兵營に駐屯してゐる支那兵だといふことがわかつて居た。

はいつて來た支那兵等は、あたりをヂロ〳〵睨め廻して、やがて倭一等の姿を發見すると、まるで不思議なものでも見つけ出したかのやうに、眼を瞬かし、なにかボソボソとさゝやき合つてゐたが、やがて、その中の一人の巨大漢が、物騷な顏をして、ツカ〳〵二人の席へ近づいて來た。そして、胸を反らして、尋問でもするやうな、橫柄な調子でいひかけた。

「君たち日本人は、汽車の乘客か？」

「さうだ」

倭一は、支那語に通じてゐるので、どんな質問にも應じられるが、楠本は支那語ができないので、不安さうに、双方の顏を見比べてゐた。

「これから、何處へ行くのだ」

「滿洲里へ──」

「エッ、滿洲里へ──？」

支那兵は、さも驚いたやうに、寧ろその目隊に、瘋狂に叫んで、呆れたやうであつた。

「いつたい君方は、目下、どんな騷ぎが、滿洲里に起つてゐるか、それを知つてゐるのか」

「いゝや、知らない」

倭一は、わざとさう言つて、空呆けてみた。

「さうだらう。知つて行くならそれこそ命知らずだ。知らずに行つたからといつて、どつち道、命仕事だ。君方の足が、一歩でも滿洲里の土を踏むが最後、同時に、君方の命は、無くなつてしまふだらう」

憎々しいまでに、嘲りの色を面に浮べて、支那兵は脅かすやうに言つた。

さては、恐ろしい風說は、やつぱり事實だつたのかと、倭一は思はず顏色が變つた。

すると、その二人の問答を、傍の支那兵たちは、向ふの卓子に陣取つて、酒を始めながら聞いてゐたが、その中、一番の頭目かと覺しい一人が、突然握り拳でドンと卓子を叩いて叫んだ。

「駄目だ！　日本人は、一人だつて、滿洲里へ行くことはならないぞ！」

まるで、破鐘のやうな大きな聲であつた。同時に、支那兵一同の鋭い視線が、一齊に、倭一等の方へ注がれた。

スワと云つたら、忽ち起ち上つて來さうな權幕で、楠本は、[illegible]

執政御招宴

執政には二日午前十一時より菱刈軍司令官並びに滿洲國大官を召され新年の御宴を行はせられた

事變以來初めての朗らかな新春

到るところ大賑ひを見せて 全市歡喜に色めく

かくやく昭和の第九春は日嗣の皇子の御降誕を壽ぐ奉祝の歡呼のうちにあけた。瑞雲たなびく首都新京の元旦はいつにない晴れやかに日の丸の國旗がへんぽんと翻る街々のいとも朗かにきたなんと『平和』な新年であつたことか

この日軍司令部では午前九時半から營庭に菱刈司令官以下參集して小磯參謀長から司令官に年頭の祝辭を述べ、終つて有位榮勳者は御眞影を奉拜同十時から軍司令部酒保で一同祝杯をあげ事變いらい初めて見る新年らしい新年を迎へたのである、菱刈司令官はその後大使として溥執政を訪問小磯參謀長以下引續き面謁して、夫々賀詞を呈したのであるが一方滿洲國々務院における祝賀式は午前九時會議室に參集、鄭總理以下參集して互禮會が行はれ遠藤廳長の『發聲』で萬歲を三唱した、總領事館に於ける遙拜式が例年にない賑かさで官民うち伴れて續々と詰め寄せやがて午後零時半から西廣場小學校講堂に總領事館並に地方事務所主催の官民合同新年互禮會が開かれたが參集者實に千名に上る盛況さで一同聖壽の萬歲を三唱して散會、その他附屬地の各機關、各學校でもそれぞれ遙拜式を舉行したが何はともあれ今年は新皇太子殿下の御降誕で全市の歡喜も一しほ、唯だ朗かに芽出度く夢のやうにこの三日間を送つたのであつた

新京愛知縣人會の忠魂碑建設醵金

總額凡そ千圓見當 加藤代表ら軍司令部を訪問

日露開戰當時の步兵第六聯隊（名古屋）戰死將卒のため鈴木參謀および原大尉ら忠魂碑建設委員の依囑に依り新京愛知縣人會發起の下に過般新京市內一圓並に滿洲國政府および吉林方面に亘つて在住縣人會から醵金募集についてでは既報の通りであるがその募集期限も舊臘十二月末となつてゐたので加藤地方委員、木下幽霄館長は同縣人會を代表して軍司令部に鈴木、原兩建設委員を訪問し募集醵金を手交するところあつた、なほ吉林および滿洲國政府側の醵金は本年一月中に取纏めるはずで總額約千圓に上る見込みである

十九の娘家出

市內室町二丁目十一番地水江寬一氏妹貞子（一九）さん（假名）は三日午後八時ごろ同家使用人吉田仙次郎氏に連出され外出したまゝ行方不明となつたので家人は新京署に保護方を願出た

郵便屋さんは十日ごろから正月

年賀狀の山、山、山

お正月を他の人々と一緒に面白く暮すことも出來ず元旦を前後に旬餘の長きに亘つてそれこそ文字通り不眠不休の事務勞働をなした郵便局の年賀狀取扱ひの總決算をちよつと伺つて見やう、新京郵便局では本年年賀狀引受豫想は十五萬通と見てゐたが實際引受けも大体そんな數で舊臘二十日から三十一日まで引受が十六萬五千三百五十九通で、昨年の八割五分增加、到着數は八十五萬五千二百三十二通到着の年內（元日配達）の分は昨年と大差ない、今年は內地方面の差出しが遅れたと見えて年越してからの到着數が多く一日着（二日配達）が十五萬八千七百通で、前年と比較して六萬五百增加、二日着（三日配達）十八萬七千三百八十八通で前年より七萬八百餘通增加 三日着（四日配達）は十四萬六千十五通の前年より五萬千餘通增加 この樣に年內年越しともに前年より增加の到着賀狀を取扱ふため臨時雇員十名新京商業學校生五年六名、四年六名合計二十二名、なほその外に一名增加したから結局臨時が二十三名入つた、局の定員百五十名とともに百七十三名のものがその任に當つたわけで時間的に見れば三十一日が翌日即ち元旦の午前五時まで、元日は翌日の午前三時半まで、二日は翌日の午前三時四十分まで、三日は翌日の午前三時半までで殆ど不眠不休で本當に正月氣分になるのは一月十日頃だといふ

感想を語る 高橋郵便局長さん

高橋新京郵便局長にその總動員の感想を尋ねると、未だに正月氣分を味ふことも出來ずながら次のやうに語る

何しろご覽の通り四日といふのにこうして戰場同樣です、お蔭で事務も集配も滯りなく果し得たことは局員一同の一方ならぬ努力の結果です、私などはお正月は忙しいものと思ひ込んでゐますから別に遊びたいとも飲みたいとも考へません、今月の十日ごろにでもなればやつと正月氣分になれます、新京商業學校の生徒さん達十二名頼りましたがこの生徒さん達も學校から選拔された方で學校長からも實際勞働に對する訓話もあつたし、自分からも注意を與へたため皆眞面目に働いてくれました、これからも學校の方へいつてやる場合もないとも限りません

年賀狀のナンセンス

配達された年賀狀のとんだナンセンス——配達された郵便物に對する事故その他についてはその郵便物に貼付されてある切手に注意すること、話はこうである……二日の晩新京郵便局へ永樂町の一市民が郵便物十通に手紙一通を添へて屆け出た者があつた、その手紙には

私の家に昨日（元旦）も配達を間違つて、他家の內へ來た年賀狀が配達されたから返へしたのに、皮肉にも又々今日（二日）もこの十通が配達されたからご注意下さい

この意味の手紙であつた、局員が不審に思つて十通の郵便物を檢べて見たら十通とも滿洲國及び中華民國の切手が貼付されてあつた、滿洲國、中國の切手貼付の郵便物は全部滿洲國郵政局取扱ひでこの郵便物も頭道溝郵局が配達したものと判明して新京局から頭道溝局へ廻されたといふ

活動常設館から正月をのぞく

總收入五千三百三十圓餘 八千四百四十三人

新京キネマ長春座では正月興行として特別映畫を松竹（長春座）日活（新京キネマ）から配給され係員は必死の活動をなし熱鬪を振ひ連日連夜大入滿員の盛況を呈した、三日間に兩館に落ちた總入場料金は五千三百三十圓八十錢、入場人員は八千四百四十三人である、今各館別に見ると新京キネマ入場員三千七百八十人、入場料金二千八百八十八圓九十錢で

	人員	料金
一日晝	四九一人	三五八、一〇錢
同日夜	六五四人	五二二、九〇錢
二日晝	四三一人	三〇六、六〇錢
同日夜	七四〇人	五九〇、五〇錢
三日晝	七五三人	五〇五、〇〇錢
同日夜	七一〇人	六〇五、八〇錢

長春座は總入場員四千六百六十三人入場料金二千四百四十一圓九十錢で

	人員	料金
一日晝	三六五人	二〇五、一〇錢
同日夜	九九五人	六八〇、四〇錢
二日晝	一二六八人	一六二、四〇錢
同日夜	八七九人	六一七、六〇錢
三日晝	一二七七人	一六八、八〇錢
同日夜	八七九人	六一七、六〇錢

沖、横川兩勇士等のフヰルム作成

小松原大佐が主となり

挺身北滿の奧地に潛入東清鐵道の破壞を企て哀れ北滿の花と散つた横川省三、沖禎介、松崎保一、中山直熊、脇光三、田村一三の六烈士事蹟保存會ではこの六烈士の武勳を永久に記念するため今回「大和櫻北滿の落花」と題する全十二卷一萬五千呎の大長尺映畫を作製することとなり委員長小松原大佐が主となつて內地撮影所と交涉中であるが荒木陸相推賞、陸軍省、關東軍司令部、在鄉軍人會本部、愛國婦人會本部、滿鐵が後援一月初旬頃から撮影を開始する答である

全滿洲國警察官 近く撮影

民衆の啓蒙は自よりをモットーに、滿洲國の國民を映畫によつて指導せんとする滿洲映畫國策研究會の事業は着々進捗し、いよいよ今回民政部警務司に於ても、滿洲國第一回國策映畫として「全滿洲國警察官」を作製することとなり、既にシナリオを脫稿、目下審議中であるが、同映畫は蘇炳文叛亂事件より、熱河、山海關聖戰に於けるまでの國境警察隊の尊き犧牲、及奮鬪を記錄的に示した大記錄映畫で、全長約八卷二月頃から撮影着手の豫定

天氣と氣温

けふの天氣西の風晴四日の氣温最高零下十五度最低零下二十四度四

新京名物馬糞袋が街から消える

馬車屋から掃除代を寄附させ

首都乘用馬車人力車營業組合から滿鐵地方事務所長宛馬糞袋撤去方の陳情に關し地方事務所では關係各所と協議中のところいよいよ三日から撤去することゝなつた、然し組合では馬糞袋撤去後の街の清掃に關し新に清掃人夫賃として組合所屬馬車一台から一ケ月三十錢を徵收し地方事務所に寄附することゝなり、これで雙方ともに種々便宜を得ると同時に街の清潔も保たれることゝなつた同時に新京名物馬糞袋も新京の街から姿を消したわけである

四戸家不幸

四戸友太郎氏長男一氏は舊臘流感に罹り滿鐵長春醫院に入院加療中の處肺炎を併發三十一日午後七時死去、喪を秘してあつたが來る六日午後二時途中葬列を廢し曙町大正寺で葬儀を執行する

火災二件

三日午前十時二十分ごろ市內祝町四丁目十二番地木下米三郎氏方から出火し一戸七坪を全燒し同十時五十五分鎭火した、損害六百圓原因は神棚のロウソクから神棚に點火したものである

▲同日午後八時二十分三笠町二丁目十三番地待合由良之助こと圓羽橋治氏方客室から出火したが家人が發見し消火に努め同[illegible]十五分大事にいたらず鎭火した。原因は煙草の吸殼から揮發油に點火したもので損害五十圓營業には差支へない由

初夢判斷絵ほどき

雪が降る夢は病苦をのがれる

雪にあふ夢は酒食にあふ

門戸を開く夢は口舌が起る

美人を見れば大吉事がある

髮を洗ふユメは病気がとつきよい夢

山崩れの夢は災難がある

理髮のユメは大吉上々

妻君が死んだユメを見たら大凶

なつた夢は長生きする

雷に打たれたユメは大吉

空飛ぶユメは大損害がある

人に斬られたユメは金もうけする

鋤鍬のユメは至極よろしい

刑務所へ入るユメは大々吉

渡し舟に乘つて渡つたユメは大富貴

細君と同道したユメは財を失ふ

酒をのむユメは口舌

慶安異聞 艶魔地獄

（講談化）玉水三郎　（畫）長谷川小信

（百三十五）

敵寶藏（七）

お瀧の兄は妻戀坂の三五郎といふ、無賴の徒であつた。

無賴の仕打に、餘りの事と腹を立つたお八重は、遂に袖を拂つて其家を飛出して了つた。

三五郎は戸外まで追つては出たが、泥醉の爲に足許が怪しいので軒下に立往生して了つた。

其處へお瀧は歸つて來た。

「兄さん何うしたのさ」

「阿魔め。素敵つこいので到頭逃がして了つた」

「アツ、そんなら失策つたのかい、だから私がくれ〴〵も言つて置いたぢやないか。玄人だからあんまり剝き出しにしちや可けないつて……」

「それが強情だもんだから、ツイ手籠めにしやうとして……」

「そんな事だらうと思つてゐた。仕樣がないね兄さんは……」

「何うも仕方がねえや」

「ではもう飯盛で行くより外はないね」

「さうだ。あのお八重がゐたんぢや、お前の身が立たず、又月代の店が潰れるといふんぢやア、少し無理をしても、お八重の阿魔を……」

「兄さん、手荒い仕事だが、此の間言つたやうに、巧くやつてお呉んな」

「可し、心配するな。これもたつた一人の妹の爲だ」

「お前がさう言つて呉れりやア、私も嬉しいがね。何分月代のお母さんが、喧しいもんだから、少しも早くやつて呉れないと……」

「可し〳〵、時にお瀧や、兄さんは此頃滅法金都合が惡いんだ。少し都合して呉んねえか」

「何日でも極まつてるよ。何か喰むとたつた一人の妹の爲だとか何とか言つて、いつもお金だね」

「マアさう言つて呉れるな。乃公だつて一つ好い目が出りやア、手前に水茶屋稼ぎはさせやしねえや、だが此頃のやうに、出るたア取られぢや仕方がねえ、マア幾らでもいゝから、都合してくんな」

「今夜と言つても、私だつて都合があらアね。ぢやア茲に一兩あるから、今夜はこれで辛抱してお呉れ」

「一兩。大したもんだな。やつぱり女は始末が好いや、ちやんと一兩の金を、懷に入れてるなんて……エツヘツヘ。ぢやア當分借りて置く」

「ぢや、今言つた事は、一日も早くね」

「合點だ。明日にもやつゝける。心配するな」

懸から二人、ヒソ〳〵密談を交はして、お瀧は歸つて行つた。

其翌朝の事である。お瀧はお八重の顏を見るがものうく、月代の店へ出まいかと思つた。

それだけ眞心に咎められてゐたが、却つて怪しまれるのを懸念して恐る〳〵店へ出た。

旣に三吉郎は、店を飾つて客を待つてゐた。お瀧は其店から見られぬやうにしてゐると、軈て快活なお八重は、逛つて來て。

「お瀧さん、昨夜は眞實に失禮しました。私もう大變醉つて了つて、歩けさうにもありませんから、一緒に歸る約束を破つて私一人先に出して駕籠で歸りました。何うか勝手して濟みませんと、兄さんへもお序におつしやつて下さいな」

昨夜の兄の亂暴に付いては何一言云はぬお八重の挨拶に、有繋のお瀧も返事に困つた。お八重は何時もにこ〳〵と、少しも平日に變つた容子を見せなかつた。

一月五日　金曜　丙子　赤口　鬼宿

- ●一白の人　希望計畫は成就し當年幸運の第一歩を踏出すべし　辰と辛と丑が吉
- ●二黑の人　意外の事象より崩落す油斷なく警戒すべし　丁と辛と丑が吉
- ●三碧の人　努めて心ます心の散亂を防ぎ倦まず撓むな　坤　壬と癸が吉
- ●四綠の人　運途面白からず新春の醉心地に乘じ失敗す　辰と壬と癸が吉
- ●五黃の人　内に英氣を養ひ他日奮闘の好機を待つべし　丙と庚と亥が吉
- ●六白の人　本分を堅く守りて妄動せざるが安全なる日　丁と戊と寅が吉
- ●七赤の人　家業に精勵して他事には心を移さぬが得策　乙と丙と辛が吉
- ●八白の人　奮起して功を奏するも焦るは後に失敗の基　甲と庚と壬が吉
- ●九紫の人　根基を失はず努力せば功あり盜難病氣注意　乙と辰と丁が吉

正月の衛生

食べすぎと飲みすぎと二日醉の手當

腹こはし、下痢、慢性胃腸病の療法

緣起も榮養もよい正月料理

およそ喜ばしいものは、日の本のお正月料理でせう。——昆布がヨロコブに通じ、大豆、田作がマメ（健康の意）に通じ、數の子が子孫繁榮を意味し、屠蘇の酒は百藥の長といひ、勝栗はカツといふ緣起を祝つたもの——。

しかもこれらの食物は、榮養分が多いので、保健上にもまことに結構ですが、兎角お正月は食べ過ぎ飲み過ぎの上に、運動不足に陷り易く、その爲にお腹を毀して下痢したり、胃にもたれたり、二日醉ひして心身ともに倦怠を覺えたりする、よからぬ景物がつくのは感心いたしません。

それも手當が早ければ、何でもないものを、手當が遲れたり誤つたりして遂にコジらせ、慢性の胃腸病としてしまふに到つては、折角緣起を祝つた年頭料理も、禍の因となつてしまひます。

二日醉ひの病理とその手當

醫學上からいへば、二日醉ひは急性アルコール中毒と、胃カタルを併發したものです。アルコールは元來、よく吸收されて、速かに尿中に排泄される性質のものですが、多く飲み過ぎると、これを吸收して排泄する働きが間に合はなくなり、其爲にアルコールが體内に長く停滯して中毒を起し、所謂二日醉ひの徴候を現はします。ですから二日醉ひは、これを未然にも防ぐにも、飲んだアルコールを早く體外に出して了ふ働き、つまり一種の新陳代謝作用を活潑にするのが第一です。——東京帝大の澤村名譽教授が、ヘーフエといふ微生物から造られた「錠劑わかもと」といふ藥が、二日醉ひにいいといふので、飲酒家の間で大いに愛用されてゐますが、これはヘーフエの有つ、多種の活性酵素の働きによつて、新陳代謝が促進されると同時に、利尿作用を有するプリン鹽基が、ヘーフエ蛋白から生成されるからだと考へられてをります。

食べすぎの手當

食べ過ぎて胃にもたれたり、消化不良に陷つたりすると、誰でもヂヤスターゼを、無二の良藥の様に用ひますが、ヂヤスターゼの消化するのは澱粉だけで、食べた物の一部分に過ぎませんから、消化藥として決して、萬全な物とは云へません。

所が「錠劑わかもと」には、ヂヤスターゼは勿論、お正月料理に澤山含まれてゐる蛋白質を消化する、プロテアーゼといふ酵素や、脂肪を消化するリパーゼといふ酵素を含んでゐて、あらゆる食物の消化、吸收を助ける許りでなく、衰弱してゐる胃腸の細胞細胞に、再生の活力を與へる多種の活性酵素を含んでゐますので、食べ過ぎ飲み過ぎから起つた胃腸病は素より、慢性の胃腸病で困つてゐる場合でも、腸胃の機能を病原から恢復して、治癒に向はしめる効果は、臨床醫家の、等しく認めてをる所であります。

乳兒の便秘

便秘の時、醫師の手を經ないで、自分で下劑や浣腸藥を用ひて、盲腸炎など起す事は、大人の場合でも屢々ありますが、特に乳兒の場合この危險は一層多いのです。

家庭で乳兒の便秘を癒す、最も安全な方法は、授乳の際に、「錠劑わかもと」一、二錠を碎いて少しづつ與へ、人工哺育の場合は、牛乳や重湯の哺育料中に、四、五錠宛碎いて入れてやるとよろしいのです。

「錠劑わかもと」中には、多くの消化酵素があつて、胃腸の具合を整へ、便通をつける許りでなく、ヴイタミンBやDが多くあつて、乳兒の發育を促進し、腺病質を防ぐことが出來るのです。

胸やけを癒すには重曹劑の濫用は惡い

食後胸やけがするとか、胃に始終膨滿感があつて、食事時になつても、お腹が空かないといふ方がありますが、これは明かに胃腸病の症候の一つで、胸やけするのは、胃腸病でも特に

難症とされる

胃酸過多症に最も多く、胃下垂の疑ひも多分にあります。胃酸過多症は、胃液の分泌を司どる胃壁の細胞機能に變調を來し、胃液の分泌が亢進し、その結果、胃液中に鹽酸が過剰となる病氣であつて、胸やけがしたり、胃が痛んだりするのは、鹽酸の刺戟によるのです。

胸やけには從來、重曹劑が用ひられ、素人でも自分で重曹劑を買つて服んだりしますが、かうすると一時は鹽酸が中和されて、胸やけが止まりますが、重曹は分解すると炭酸瓦斯を發生し、これが更に胃壁を刺戟して、鹽酸の分泌を促すので、却て

病勢を惡化する

ことがわかりましたので、有名な帝大の眞鍋教授等は、胃酸過多症に重曹劑を用ひる事を、非常に嫌忌されてゐます。

近來經驗ある醫師達は、こんな場合にも、ヘーフエ菌で出來てゐる「錠劑わかもと」の服用を勸めますが、これは「錠劑わかもと」中に、胃液の鹽酸を中和する成分を持つてゐる事にも起因するが、寧ろそれよりも、變調を來してゐる胃壁の細胞に働きかけて、異常に亢進してゐる機能を、正常に引戻す效果があるによるのです。又一面「錠劑わかもと」には消化を促進する成分もあつて、胃酸過多のみならず、胃アトニーや胃下垂等の膨滿感も自然に消え

空腹感を覺える

様になります。殊に、在來の化學製劑と違つて、副作用がなく、長く服用しても習慣性がないので、一般に常用されてをります。

この優れた生物藥を、ヘーフエといふ菌から發見されたのは、一に澤村名譽教授の苦心の賜物ですが、其上篤志を以て、廿五日分一圓六十錢、八十三日分五圓、試用ポケット瓶五十錢といふ奉仕的廉價で、東京市芝公園大門内、榮養と育兒の會（振替東京一七〇〇番）から頒布する様にされました。右へ藥價だけ拂込めば、一瓶でも送料負擔で急送されますが、便宜上全國藥店でも取次ぎます。

肺病を併發した胃酸過多症が

東京　山井惣一郎

（前略）私は小さい時より、學生當時にも極く健康體にて、何の病も知りませんでしたが、廿歳の春より、時々胸のやけるのを覺える様になりました。どうした事か、大分肥つてゐた身體も

徴兵 檢査の時には體重減じて、不合格でした。が、別に氣にも止めずにゐました。この年の秋から、益々胸のやけるのが激しくなり、[illegible]

から胃の中がヂキ〳〵と痛むので（中略）それより僕は病名がわかりましたので、人に聞いて、あれこれと、人のよいと云ふ物を買求めて服用したり（中略）左肺尖を病む様になりました。身體の衰弱は增す許りにて、私の生涯は

絕望 のどん底につき落されましたが、天の助けとも今は感謝してゐるのです。〃胃酸過多症〃だからといつて、（中略）

が、去る昨年の夏に、友人の勸めにいや〳〵乍らも「錠劑わかもと」を買求めて服用し始めました。廿五日分一瓶も（中略）廿日程で終り、二瓶目を半分程服用してからはじめて、食慾の出て來た事や、酢つぱい水の上げなくなつて來た事に氣がつき驚きました。七年以上もあの胸の痛み、重苦しい頭痛など、朝霧の去る如く段々とうすらぎ、日々爽快の氣を覺える様になりました。胃散や重曹などは、二三日服用を中止すると直に、胸焼痛りましたが「錠劑わかもと」服用以來、時として服用せぬ時あるも、益々榮養を增し（中略）體重も增えて、毎日愉快な日を送つてをります（下略）